京都大学学術情報リポジトリ
KURENAI 紅
Kyoto University Research Information Repository

京都大学
KYOTO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | <論文>キリスト教の神の日本語訳「神」　―「用語問題」との関連で― |
| Author(s) | 金, 香花 |
| Citation | キリスト教学研究室紀要 = The Annual Report on Christian Studies (2015), 3: 35-56 |
| Issue Date | 2015-03 |
| URL | https://doi.org/10.14989/197487 |
| Right | |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | publisher |

Kyoto University

キリスト教学研究室紀要

第 3 号 2015 年 3 月 35～56 頁

# キリスト教の神の日本語訳「神」　－「用語問題」との関連で－

金香花

## 1、はじめに

19 世紀プロテスタント宣教初期の聖書翻訳において、中国語の場合に起きた「用語問題」（キリスト教の神を「神」に訳すか「上帝」に訳すか）は、その影響が非常に大きかった。翻訳の主導権が宣教士側にあったため、中国語訳聖書だけでなく、日本語訳聖書とハングル訳聖書における神の訳語を決めるときにも、影響を及ぼしている。

「用語問題」に関するまとまった議論としては、程小娟が著した『God 的汉译史』があり、翻訳理論の視点からこの問題を論じたものには、柳父章の『ゴッドは神か上帝か』がある。

キリスト教の神の訳語論争には、聖書翻訳という出来事に含まれている様々な問題が現われ、様々な側面から議論することができる。

ここでは、キリスト教の受容者がキリスト教の神をどのように理解し、神の訳語をどのように使用したのかに注目したい。特に、極端に宣教士側によって一方的に決められたように見える日本語の「神」の場合を検討することにする。キリスト教の神は、伝える方から一方的に決められたとしても、その訳語を訳語として成立させるのは伝えられた方の受容者である。

本文では、まず明治初期のキリスト者たちがどのような言葉でキリスト教の神を表現したかを見、このような多様な表現と正反対に「神」が日本語の訳語として決められた原因を鈴木範久の論を通して確認してみる。それからは、植村正久、内村鑑三と海老名弾正が使用した「上帝」を分析することを通して、中国語の訳語論争であげられた争点が日本語の場合も存在したことを確認する。それと同時に、このような葛藤の時期から「神」という一つの表現に落ち着く中で、日本人キリスト者たちがキリスト教の神を受け入れるプロセスを見いだす試みをする。「神」がキリスト教の神の日本語訳として成立するには初期のキリスト教受容者たちの努力なしには語ることができないと思われる。

## 2、キリスト教の神の日本語訳

19 世紀プロテスタントの宣教初期において、聖書が中国語に翻訳される中で、キリスト教の神を「上帝」に翻訳するか、それとも「神」に翻訳するかというはなはだ激しい論争が行われた。結局、意見が折り合わず、今日に至るまで「上帝」版と「神」版聖書が共存するようになっている。

それに比べて、同じくプロテスタント宣教初期に翻訳された日本語訳聖書においては、ヘボン訳聖書から「神」が使用されてきた。

中国語訳聖書と日本語訳聖書との間に、なぜこのような大きな違いが表れたのか。そこで、聖書が日本語に翻訳される中でのキリスト教の神の訳語に注目してみた。

### 2-1 明治初期におけるキリスト教の神の表現

「神の訳語」というテーマでまとまった論文に鈴木範久の「『カミ』の訳語考」がある。ここでまず、鈴木の論を通して、明治初期の「カミの訳語」の状況を確認してみることにする。

日本語訳聖書においては、ヘボン訳聖書から「God」の訳語として「神」が使われ、宣教師たちの中では記録に残った紛糾もなかった[1]と言われている。このような状況になったのは、アメリカ系宣教師が翻訳の中心に立っていたが、それらの宣教師たちは「神」を主張する中国語訳聖書を参照にしたことにその理由がある、と鈴木範久は言っている[2]。

しかし、宣教師たちの中で論争がなかったことは、その翻訳された聖書を読む読者も何の抵抗もなしにそのまま受け入れたことを意味するのではない。キリスト教の神と日本語の「神」の間に大きな相違があることを、日本人読者は認識しており、「神」という訳語に対して、かなりの抵抗があった。それを鈴木範久は、初期の代表的な日本人信徒たちの体験談を通して語っている。

井深梶之助がある国学者に伝道したときに、「…創造主たる真神は唯一無二」だというと、その国学者は「神は決して唯一に非ず多数あるべき道理なり」と大反対した。同じ「神」の字が使われても、キリスト教の神と日本語の「神」の間には大きな相違があるため、キリスト教に関する説明は「神」の説明から入るのが常識であった[3]。

鈴木範久は「God」の訳語として「神」が使われたことに対して、次のように言う。

「アメリカの宣教師たちにより、キリスト教の「カミ」は「神」として訳されたものの、これは日本人の信徒たちにとり、それまで理解していた「神」の語からくる概念とは大きな懸隔があった。そのことは、単にキリスト教を伝道するのに支障を感じさせたのみならず、信徒自身、日本の「神」概念を手がかりにキリスト教の「カミ」概念に到着することを阻まれた」。[4]

松村介石は、「天帝、上帝、皇天」などの儒教的概念を介して、キリスト教の「神」概念に到達しようとし、山本秀煌も「天」や「上帝」を介することによって、日本語の「神」をもってするよりも、よりよくキリスト教の「神」概念を伝達できたと言う。中村敬宇においても、キリスト教の「神」を「天」または「上帝」として表している用例が目立ち、内村鑑三にも「上帝」をもってキリスト教の「神」を表す用例が見える[5]。植村正久には「真神(まことのかみ)」とか「上帝」などの語が用いられた。

また、1885 年 12 月に、日本で最初のキリスト教新聞といわれる『七一雑報』が発行されたが、その一号から三十号までによって、その中で「カミ」にあたる語が、どのような言葉でもって表現されているかを、拾いあげてみると次のようになる[6]。

神(かみ)

真神(しんしん)、真神(かみさま)、真神(まことのかみ)、真神(かみ)、真(まこと)の神(かみ)

上帝(かみさま)、上帝(あまつかみ)、上帝(しやうてい)、上帝(かみ)、上帝(まことかみ)

天父(まことのかみ)、天父(かみ)、天父(あまつかみ)

造物主(かみさま)

天主

漢字で見ると六種類であるが、ルビによる特別の読み方から見ると、一六種類の用い方がみられる。

鈴木範久は、日本語の「神」の意味内容[7]を説明するにあたって、本居宣長の「神」の説明を取り上げ、「このような『神』概念は、のちに時代的展開や仏教などの影響によって若干の変化はみられるが、基本的には、主な性格をそのまま保って、近代にまで至っている」[8]とみている。

「さて凡て迦微(カミ)とは古(イニシヘ)御典等(ノミフミドモ)に見えたる天地の諸(モロモロ)の神たちを始めて、其(ソ)を祀(マツ)れる社に坐(スミ)御霊をも申し、又人はさらにも云(ハ)す、鳥獣木草のたぐひ海山など、其余何にまれ、

尋常ならずすぐれたるのみを云に非ず、悪しきもの奇しきものなども、よにすぐれて可畏きをば、神と云なり。」[9]

鈴木範久は、この「カミ」概念をキリスト教の「神」と比較し、両者の間には歴然とした相違がみられることを指摘する。第一にキリスト教の「神」が唯一神であるのに対して多神である。第二にキリスト教の「神」が、人間、動植物、自然界の諸物、諸現象を超えた超越神であるのに対して、いずれもそれらと連続性を有して、ただ「尋常」ならないものが、みな「神」となることである。第三にキリスト教の「神」が全知全能のすぐれた「神」とされているのに対して、「悪しきもの奇しきもの」などの恐しい存在も「神」といわれることである。このほかにも、キリスト教の「神」が、とくに宇宙の創造神であるのに、日本の「神」は必ずしもそうでない。

聖書が日本語に翻訳されるときに、宣教師によって「神」という言葉をキリスト教の神の訳語として採択された。それは、聖書の中国語訳の中で起きた「訳語論争」と緊密なつながりがある。決定的な決め手が宣教師だという点において、むしろ「訳語論争」の延長だといっても間違ってはないだろう。しかし、論争のような形にはならなかったものの、明治初期にその訳語を使用する日本人キリスト者たちが「神」という訳語に対して、様々な悩みを抱えていたことは確認できる。

**2-2 鈴木範久の「神」への言及**

鈴木は聖書の日本語訳における「神」について論じる前に、まず、キリスト教の神が、異なる文化の地に伝えられ、訳されるときに見られる様式を次のように四つにまとめている[10]。

①「カミ」を、原語で表すか、それに近い言葉で音訳する。(例、Deus、デウス)

②「カミ」を、その伝えられる地の「カミ」またはそれに近い言葉で訳す。(例、上帝、神)

③「カミ」を、その伝えられる地の「カミ」の言葉に比較的近い意味の言葉を用いつつも、それをそのまま用いるのでなく、合成したりして新しい言葉を造る。(例、天主)

④「カミ」を、その伝えられる地の「カミ」に近い言葉に「真」をつけて表す。(例、

真神)

この四つの様式は、キリスト教の神の中国語訳(プロテスタント)の場合から取り出したものであるが、そのまま日本のプロテスタントにおいても使用されている。その中でキリスト教の神の日本語訳としての「神」は二番目の様式として分類されている。鈴木範久が焦点を当てているのは、2 番目の様式の中でもその地のカミの「総称」を表す語であり、聖書の日本語訳における「神」もその中で分析する。

鈴木範久の上の四つの様式からもわかるように、「上帝」と「神」を同じ様式の中に分類している。鈴木は、中国語訳聖書における「上帝」と「神」について次のように言っている。

「『カミ』の訳語として争われた『上帝』にせよ『神』にせよ、いずれも中国に既成の言葉である。だが、キリスト教の『カミ』は、明らかに中国人には新しい『カミ』である。それを、すでに中国に既成の語を用いて訳するとすると、どうしてもそこから、古来伝統的にそれらの言葉に密着している観念をとり除くことはむずかしい。この点では『上帝』も『神』も同じである。双方がついに一致をみなかった理由の一つは、アメリカとイギリスとの二国間の宣教師の対立もさることながら、このような既成の言葉を用いることの宿命にもよるであろう」[11]。

鈴木はこの訳語論争をアメリカとイギリスの二国間の宣教師の対立にその主な原因があると言う。

また、日本語の訳語が上で言った様式を採用し、これを今まで守ってきた理由に関して分析した後に、その理由は、「状況的なことに支配されたことに加えてきわめて簡単に『神』としたこと自体があげられる」[12]と言う。その結果、「キリスト教の『カミ』を日本の『神』化する一方、日本の『神』をもキリスト教の『カミ』化し、ひいては一般用語化しているといえる」[13]という。

### 3、日本の明治初期キリスト教者が使用した「上帝」

このような議論を踏まえた上で、実際にキリスト教の神を表現するにあたって、明治初期のキリスト者たちがどのように「上帝」と「神」を使用したのか、その中身を確認して

みる。

そこで、植村正久、内村鑑三と海老名弾正がキリスト教の神を表現するにあたって使用した「上帝」を分析してみることにする。

### 3-1、植村正久[14]が使用した「上帝」[15]

鈴木範久が取り上げているように、植村正久にはキリスト教の神を表現する用語として「真神（まことのかみ）」とか「上帝」などの語が用いられている。もちろん、「神」の使用回数が圧倒的に多い。二番目に「上帝」が多く、最後が「真神」である。当時日本の知識人たちは漢文の影響を多く受けている。また、聖書や教理書に関しても、日本語訳が出版される前に、すでに漢文の聖書や教理書を読んでいた[16]。これは植村正久が漢文の聖書から直接に箇所を引用したところからも明らかである[17]。漢文訳聖書は聖書を日本語に翻訳した宣教師たちに影響を及ぼしただけでなく、最初の日本人受容者にも影響を及ぼしたことを確認することができる。

「人類の上に超越せる絶大の勢力」という意味において、「上帝」は「神」と区別なしに使われている。またキリスト教の神を、とくにある特徴への強調なしに指し示す場合にも両方が使われている。しかし、それと同時に、両者がはっきりと区別して使われる時もある。「上帝」の用例を集め、「神」と比較してみたら、次のような三点が言えるのではないかと思われる。

1、唯一性、絶対性を特に強調しようとするときに、「上帝」を「神」と区別して使っている。礼拝されるあらゆるものを「神」で表現し、唯一性と絶対性を「上帝」で表現する。使用箇所を取り上げてみると次のようなものがある。

「試みに数限りもなき神々様を拝せる人と唯一の上帝を拝せる人とを取り来りてこれを比較せよ……不義なる神は不義なる人を造り、純潔なる神は、その人を純潔にす」[18]。(明治 26 年)

「ゆえにいわく、上帝（かみ）は独一にして二あることなし。世の人が衆多の神を崇むるは甚だ理由（いわれ）なき迷謬（まよい）に　あらずや」[19]。(明治 18 年)

2、「上帝」の使用の中で一番特徴的なのは「天父」と組み合わせて使う表現である。

「宇宙の大主、無限、絶対なる上帝、至仁、至愛なる天父の前に跪き…」[20]。(明治 17 年)
「かかる世界に住みて、これを主宰する上帝我を保護するの天父存在するなきを確知す」[21]。(明治 17 年)

このような表現は、創造者なる神の特徴を明確に表現している。天地の創造主は宇宙の主であり、宇宙を主宰している。しかし、それだけではなくて、また至仁、至愛であり、我を保護してくれる父である。植村正久によると、キリスト教の特徴は神を天の父と呼ぶことである。

「人類の上に超越せる絶大の勢力(いきおい)あるを認めずんばあらず。……キリスト教徒のごときはこれを呼んで天の父という」[22]。(明治 26 年)
「しからばキリスト教の神はどういうものであるか。神はすなわちわれらの天の父である」[23]。(大正 12 年)
「神は父なりとの一語、その意義無量なり。キリスト教はこの一点に帰着す」[24]。(明治 33 年)

「天父上帝」という表現は、キリスト教の神の創造者という特徴を明確に表している。すなわち、天地の造り主であると同時に全能の父である。

3、「上帝」という表現は、イエス・キリストと聖霊に関して語るときは、あまり見られない。キリストに関しては「上帝の聖子イエス・キリスト[25](明治 18 年)」という表現がある。しかし「キリストすなわち神を意味す[26]」とか「(イェスは) 自ら神と匹(ひと)しくあるところの…」[27]というような表現では「上帝」が見当たらない。

**3-2、内村鑑三が使用した「上帝」**

内村鑑三は、最初にキリスト教を受容した日本語使用者の一人でありながら、そのキリスト教思想が日本のキリスト教界に大きな影響を及ぼした人物である。

『内村鑑三全集』の中で内村が使用した「上帝」の回数は非常に少ない。その中で、四

分の一は父親(内村宜之)宛に書いた書簡の中に出てくる。内村が父親との関係の中で「上帝」を使用したことに関しては、ここで扱わないことにする[28]。内村が公に雑誌などで使用した、残りの使用箇所のみを扱うことにする。

内村鑑三は書き言葉として英語をかなり使用していた。それにもかかわらず、全集にはわずかではあるが、漢文聖書の引用もあり、また漢詩の引用も出てくる。例えば、宋真宗赵恒の『励学篇』[29]の引用や、漢文聖書の箴言 16：18[30]の引用がみられる。もちろん、漢文の引用は初期に集中されている。これは、「上帝」の使用と同じ特徴を持っている。「上帝」の使用は、明治 18 年から明治 35 年の間にのみ見られる。すなわち、初期の文章に限って使用されていることである。

「上帝」の使用回数は少ないが、キリスト教の神を表現するために「上帝」を使用することに対して、当時の内村鑑三は違和感を持たなかったことを読み取ることができる。そこには、初期キリスト者たちの間で、「上帝」の意味を媒介に、キリスト教の神理解へ到達することがある程度の説得力があったように思われる。

では、内村鑑三が使用した「上帝」の中身を見ることにする。

1、まず、「上帝」は「父、子、聖霊」の中で、「父」なる神を表現するところで使用されている。

「ピラトが彼に告げて『我に汝を十字架に釘る権威あり亦汝を釈す権威あり、汝此事を知らざる乎』と申しました時に、基督は『汝、上より権威を賜はらずば我に対つて権威ある事なし』と答へられました、即ち『上帝汝に我が生命を奪ふの権を与へ給ふ迄は汝は我を殺す能はず』との意を示されました、…」[31]

「約翰は忽ち悪人共の酒の肴となつて夕の露と消失せて仕了つたのである、シテ見れば上帝に愛なるものがあるのであるか基督に奇蹟を行ふ力が有つたのであるか……」[32]

2、「天」、「上」という意味を強調して表現する場合に使用されている。例を挙げると次のようなものがある。

「爰に於て我々は興国は上帝の特別の恩恵に依るものにして、是れ人意の望んで達し得

べき事でないことを感ずるのである、……実に天佑に非ざれば国を起すことの出来ない……彼(ビスマーク)は幾回となく彼の友人に語って彼は僅かに上帝の機関に止まらなかった事を白状した、……」[33]

ここでは、超自然的な、「人而上の」存在、すなわち「上」、「天」を強調している。また、

「我一人いくら悶躁いても日本国は救へない、日本も他の国と同じ様に、成る様には成るであらう、『上帝は天に在せり、地上の事憂慮するに足らず』だ、為すべき丈けの事を為して他は之を上帝の手に委ぬるが智慧の絶頂だ」[34]。

のように、上帝は、「地上」と対照的に「天」にいる存在として表現されている。

このような「天」、「上」という意味の強調は、また人の意志では左右できない、神の絶対なる権威をも表現している。興国というのは人がどれだけ望んでも、絶対なる権威を持っておられる神が恩恵を施さない限りは、到底実現できないことである。そのために、ビスマルクは「僅かに上帝の機関」に過ぎないと言っただろうし、内村自身は日本国のためにいくら努力をしても、「上帝の手に委ねる」ほかに良い方法がないと思っただろう。

3、聖書的に国を治めることに関して語っているときに「上帝」を使用するが、それは、旧約聖書との関連で使われている。

「彼(主義の政治家)は国運を恒星の示導に繋ぎ、成否を上帝の聖意に任かす、……故に彼は争闘を慎しむも衝突を懼れず、公義を正すに敵の強弱を考へず。彼(英のオリバー、コロムウエル)は彼の愛する英国を以て上帝の定め玉ひし正義拡張の機関なりと信じたり、……」[35]

4、国を治めることに関しては、「公道を水の如くに、正義を尽きざる河の如くに流れしめよ[36]」という聖書箇所を挙げる。それは、理想の政治書である旧約聖書が教えてくれるものである。

「聖書は其過半に於いてもっとも高尚なる政治書なり、其旧約書なる者は猶太国民の

発育史にして、其記事の目的とせし所は地上に理想的国家を建設するにありたり」[37]。

5、内村鑑三の演説の筆記である「空ノ鳥ト野ノ百合花[38]」の中で使用されたが、創造主を強調している。

これらの使用例をみると、「上帝」は天地万物の創造者であり、絶対なる主権者であり、また父なる神である。これらの特徴はやはり旧約的な神の特質に近い。これは、植村正久にも同じく見出せる特徴である。

**3-3、海老名弾正が使用した「上帝」**

ここにおいては、雑誌『新人』の中に出てくる用例を中心に、海老名弾正がキリスト教の神を「上帝」で表現するときに、どのような意味で使用したかを分析してみることにする。『新人』の中にもそれほど頻繁には出てくるわけではないが、「上帝」がどのような意味で使用されているのかははっきりしている。その使用例を整理してみると以下のようなことがいえるであろう。

① 主宰者としての神を表現する。

「此天地を主宰して居る活ける上帝は確かに自分の親である…」[39]

海老名が使用した「上帝」はあくまでも「文王の」[40]上帝であり、「孔子の上帝」[41]である。すなわち儒教で理解されている意味での上帝であることをはっきり意識している。『七一雑報』第八巻に掲載された「天国論」で描かれている「上帝」はまさにそれである。

海老名は天国を描く前に、まず地上の国の構造を分析し、国は民、君、法からなり、「上は公義を以て法を命じ、下は忠実を以て法を守るのが道なり」[42]という。このような地上の国は有形の国であるが、天国は無形の国であるという。「其(無形の国での)民は人の霊魂なる無形の精神なり其君は上帝なる無形の霊なり其法は無形の法なる愛と潔となり」[43]。「無形の国」すなわち天国において、君は上帝である。この文章において、天国は地上の国と同じような組織をなし、キリスト教の神は地上の「君」と類似した性格を持つ「上帝」に描かれている。もちろん、この文章では天国が「上帝の国」として、基督は「上帝ノ子」

として表現されている。

つまり、海老名はキリスト教の神を「君」である「上帝」として理解しているのである。それは、キリスト教と接する前の海老名が武士の家庭で生まれ、幼いごろから受けた教育が大きく作用していたからであろう。海老名は『我が信教の由来と経過』の中で、最初に祈りに対して拒否感があり、どうしても祈れなかったという。しかし、ジェーンズ氏に「祈は造物者に対する我々の職分である」[44]と言われたとき、「私には全く光が見えた」[45]という。

「職分であれば膝も曲る。頭も下る。どんな事でもする……云ふて見ると子供の時教え込まれた忠君、頭の先から足の爪先迄教へられて居た其考が、大名の無くなつた為に、対象を失つて居た。それが神の命を聞いて動くものとなつた」[46]。

海老名が「信仰の入口」[47]と表現しているこの第一回目の回心では、神と海老名自身の関係を「君臣の道徳的関係」[48]として理解している。武士教育を受けていた海老名がキリスト教の神に接したときに、その教育に深く根ざしてある「忠君」という倫理観念がこの神を理解するに大きな役割を果たしたのである。天地の「主宰者」なる性格を持っている「上帝」という表現は、「忠」という「職分」を尽くす相手を必要としていた[49]海老名にとっては、最も受け入れやすかっただろう。

② 天父とはっきり区別して使用している。

「上帝といふでなく、造物者といふでなく、神明といふでなく、父と號すすは是へ基督彼自身の赤心である。」[50]

「…彼(イエス)れよりして以前、或は造物者と呼び上帝と稱し…」[51]

赤子の体験(第二回目の回)を通して確立する神人関係―父子関係―によって、キリスト教の神は「父」になる[52]。それは天地の「主宰者」である「上帝」ではどうしても表現できないものである。

## ４、三人のまとめ

これら三人がキリスト教の神を表現するにあたって使用した「上帝」の中身を見ると、次の二点が言えるだろう。

### 4-1、主宰者なる上帝

一つは、三人とも、主宰者、絶対者、支配者、創造者というような意味で「上帝」を使用していることである。このような「上帝」の使用は、やはり旧武士階級に生まれ、儒教の倫理教育を受けた[53]故に、武士として尽くすべき「忠」の相手として「上帝」が最も受け入れやすかったといえよう。支配者、統治者、主宰者、絶対者のような表現は「上帝」の特徴であるが、それは地上に於ける「帝王」の特徴と共通している。いや、むしろ、「帝」「上帝」という漢文がそれ自体持っている意味である[54]。「上帝」は、キリスト教の神が持っている「最高者」という特徴を当時のキリスト教受容者たちに抵抗なしに、あるいはもっとも説得力がある形で受け入れさせる。しかしそれと同時に、「上帝」はキリスト教の神を裏切ってしまう表現にもなる。それは「地上に於ける帝王という意味」のゆえである。この点に関しては例として内村鑑三の場合を挙げてみよう。

明治 35 年を最後に、内村鑑三の文章では「上帝」は使用されていなくなる。このような特徴に関しても植村正久も同様である。内村の場合、それはおそらく「上帝」を使用することによって、キリスト教に対する誤解を招く恐れがあったからであるように思われる。

> 「基督教は愛隣主義であるから社会主義に組すべきであるとか、上帝を戴く者であるから帝王政治を奉ずべきであるとか云ふのは全く基督教の何たる乎を少しも知らないから起る言であります、」……[55]

これは、明治 36 年に、キリスト教を誤解する人たちが使っていた「上帝」を内村が引用したものである。その以降の文章で、「上帝」は見つからない。

「上帝」という語が当時の日本語使用者たちにとっても、やはり「帝王」を連想させる語であったことが確認できる。確かに、「上帝」は「最高者」を表現するには便利であるが、漢文に於いて「帝」の中に含まれる意味である。「帝」は勿論「帝王」という意味をも含んでいるだけではなく、「帝王」が一番基本的な意味である。非キリスト者あるいは反キリスト者からすると、「上帝を戴く者であるから帝王政治を奉ずべきである」というように誤解するのも、仕方がないように思われる。

しかし、キリスト者である内村鑑三から見れば、これは「全く基督教の何たる乎を少しも知らない」から起こる、とんでもない誤りである。なぜなら、「基督教は此世の主義ではありません」[56]し、「基督教が消滅するまでは、之を以て一種の社会政策と見做すことは如何してもできません」[57]からである。「基督教は此世を改良するに至りまするが、然し此世の改良が其存在の理由ではありません、人を幽暗の権威より救出し、之を神の愛子の国に遷すことが基督教が此世に臨みし理由」[58]である。しかし、「…社会主義のみならず、帝国主義、共和主義、帝王主義等総て此世の経綸を目的として立てられたる主義」[59]である。

内村によると、この社会を変革させることができるのは、人間による社会政策を通してではなく、キリスト教の福音が人々の中に伝わることを通してである。

内村が、「上帝」の使用をやめたのは、同じ年に「非戦論」を唱えたのとも関連があるのではないかと思われる。「上帝」で連想される「帝王」は、領域拡大のために戦争を引き起こすのが特徴である。もちろん、非戦論を唱えたときに内村が反対したのは日本の「帝国主義」であり[60]、「帝王政治」だとは言っていない。しかし、内村の非戦論は、絶対平和主義であって、ただその時の日本が参加した戦争だけを指すのではなく、あらゆる戦争を指すように思われる。その戦争を引き起こす存在として「帝王」があるのである。「エホバの神のみ真の神たるなり、彼の身は終に世の帝王が挙って為さんと欲して為し能はざる戦争全廃を実行し給ふべし」[61]とあるように、内村の絶対的平和論は新約聖書的な神理解によるのである[62]。

「聖書の、特に新約聖書の、此事に関して私共に命ずる所は唯一つであります、即ち絶対的の平和であります、……」[63]

非戦論で内村が強調する神は、「万軍を支配する神」、「宇内を統御し給ふ神」、「山を平げ、海を干し給ふ神」、「裁判の神」、「偉大」なる神ではなく、これらの性質を持っていながら「我らと偕に在」る神、「契約の神」、「イェスキリストに在て我らの霊魂を救ひ給ふ神」、「赦免の神」、「優しき神」である[64]。

「上帝」へのこのような理解と使用は、聖書の中国語訳での「訳語論争」と共通する。聖書の中国語訳の場合に現れた論争の中で「上帝」の使用を反対したアメリカ人宣教師の主張を見ると、「①この用語は、天の統治者（the Ruler on High）と最高の統治者（Supreme

Ruler）の両方をいたるところで指すことができる。これは、神性を表すよりは、地位と権威を表している」というのがある。

しかし、そもそも、なぜ日本語において「上帝」がキリスト教の神を表現する語として使われたのか。前で言及しているように、鈴木範久によると、キリスト教の神と日本語の「神」の間に大きな相違があることを、日本人読者は認識しており、「神」という訳語に対して、かなりの抵抗があったからです。

ここで、**中国語での訳語論争の争点**を確認する。

キリスト教の「神」の訳語としてあげられたものには、実は「上帝」と「神」だけではなかったが、その中で一番強力に主張されたのが「上帝」と「神」であった。1848 年、“Chinese repository”でメドハ―スト(Walter Henry Medhurst)とブーン(William Jones Boone)がそれぞれ「上帝」と「神」を主張し、論争が行われた。

メドハ―ストは、「上帝」を主張する。彼はまず、「帝」が中国語で表現できる意味の中で、最高者としての意味を強調する。「彼らにとって、最高者は「天」、「帝」或は「上帝」と呼ばれるものである」[65]。また、キリスト教の最高者である神の「万物の創造者」という性質に注目し、「帝」にも同じような性質が含まれているのを強調する。その次に、「ギリシアとローマの多神論者による神聖なる(Divine)存在が持っている特質が『帝』にある」[66]というふうに、「神性」に注目する 。メドハーストにとって、「神」を表現するためには、何よりもまず「最高者」「創造者」という意味が重要であり、次に「神性」が重要だと思った。

その反面、「神」を主張するブーンは、まず「神」が中国人の「礼拝対象」を表現することを強調する。「『神』はあらゆる場面で、宗教的な礼拝対象であることが認められる」[67]。「また中国人が目に見えない存在を 3 つの階級に分ける中で一番上位にあり、神はこのような礼拝対象であることが明らかである」[68]。ブーンは、中国人の礼拝対象全体を表現する包括的な単語である「神」を用いて、「神聖で真実なる唯一のキリスト教の神」という意味を作り上げることによって、キリスト教の神を知らない中国人にキリスト教の神を教えるべきだという。これは、メドハーストと逆に、まず「神性」が重要であり、次に「最高者」の意味が強調される。

「神性」と「最高者」という側面はキリスト教の神が同時に持っている非常に重要な意味である。しかし、それが中国語訳の場合に問題になったのは、中国語ではこの二つの意味がそれぞれ異なる二つの単語で表現されているからである。

では、「上帝」と「神」が訳語として使用された場合、どのような問題が起こりうるのか。

メドハ―ストが「神」に反対したのは、「最高者としての神だけに使用が限定されていない単語[69]」、すなわち「霊とか目に見えない神々[70]」を意味する語を使ってはいけないからである。しかし、「神」という単語には、霊、目に見えない神々、死者の霊というような意味も含まれている。「神諭此諸言曰，……我之外，爾毋別有神[71]」というように翻訳したら、「我々に対する全支配力を要求する存在が最高者としての神でなく、霊の世界にたくさんある日常の目に見えない神々である、というイメージを読者に与える[72]」ことになる。そのため、キリスト教の神を表現するにふさわしくないという。

しかし、「神」を主張するアメリカ人宣教師たちから見ると、「上帝」の使用は、次のような問題を生じさせる。

①この用語は、天の統治者（the Ruler on High)と最高の統治者（Supreme Ruler）の両方をいたるところで指すことができる。これは、神性を表すよりは、地位と権威を表している。②五帝[73]の意味を含んでいる。③中国民衆の崇拝対象である有形の偶像を指示する。

この論争は、「最高者」を表す「上帝」を使用するか、それとも中国人の礼拝対象全体を表現する包括的な単語である「神」を用いるかであった。

日本語においても、中国語においても、「最高者」を強調し、「上帝」を使用すると、伝統的な文化の中で形成されていたもう人との意味、すなわち地上の「帝王」の意味が、キリスト教の神を裏切ってしまう。また、ギリシア、ローマ、英語のように、礼拝対象全体を表現する包括的な単語である「神」[74]を使用すると、キリスト教の神の「最高者」「絶対者」「唯一者」という特徴が失われてしまう。

日本語訳聖書においてキリスト教の神は、プロテスタント宣教師たちにより、最初から「神」に翻訳された。またそれに対して、記録に残るような論争は見つからなかった。しかし、日本人キリスト者たちが使用した訳語を見ると、中国語の場合と同じような葛藤が存在していたことがわかる。

しかし、このような葛藤だらけの訳語はこれらの限界がゆえに訳語としての資格を失ってしまうのではない。そうではなく、キリスト教の受容者たちを通して、訳語としての資格を本格的に取得するようになる。

**4-2、「上帝」から「神」へ**

日本語の「神」の訳語の問題を分析すると、上帝の限界を認識した結果、植村と内村のように使用を停止する場合や、海老名のように「父なる神」の性質の中に「上帝」を含蓄させるようになる場合が存在する。

海老名弾正の場合、キリスト教の神を「父なる神」として認識してから、「上帝」は姿を消してしまうのではない。「主宰者」と「父」の性格は必ずしも衝突するものではない。むしろ「此天地を主宰して居る活ける上帝」[75]が「自分の親」[76]なのである。

「天父は本源を意味する、…天父は造物者である。…天父は主宰を意味する、上帝教の主張する真理を含蓄するのである。…神は人類に對してはその主宰なると同時に、又恩愛の父である。…」[77]

「上帝」は「父」の中に含まれるようになる。このような神と人間との関係を海老名は「君子の関係」としても表現している。

「…天地万有の君主は、人格的であるが、吾等との関係は、君臣の干係であろうか、否々、其干係は君臣の干係に非ずして、而も、親しい君子の干係である」[78]

父なる神を意識したのちにも、海老名は主宰者なる上帝を捨てたわけではなく、むしろ父なる神に含蓄させたのである。それと同時に、当然ながら「上帝」に対する「忠」もキリスト教の中に保持されるようになる。

「忠に至つは…基督教とは甚だその主義を異にすが如き觀想を有するものあり。……基督教の信念によれば、忠は正義公道の神を尊信して之に事ふるに存す」[79]。

「言ひ換ふれば、基督教は忠孝の宗教である。基督教の神に対する態度は一面純潔なる忠である。」[80]

「上帝」という表現には、「忠」という海老名の捨てられない、あるいは逆に求めてやまない要求があるのではないかと思われる。海老名にとって、「上帝」という表現自体をキリスト教の神の表現として好んだというより、海老名の神に対する「忠」を「上帝」が表現

してくれるから「上帝」という表現を好んで使用したのではないかと思われる。海老名は、十戒の第一戒を守ることが神に対する忠を尽すものであるといい、「基督教に於て説く所の人格ある神に對する人の心は正しく忠の至誠である」[81]という。海老名によると、「忠とは人格と人格との間に起る」[82]ものである。「忠」を尽すためには、キリスト教の神は「人格なる神」でなければならない。

「神は人格以上たるとも、人格以下である筈はない。…神を人格視するは人間に取りては最も高尚なる見解といはねばならぬ…」[83]。

海老名弾正が使用した「上帝」は天地の主宰者であり、「父なる神」とは区別されて使用されている。しかし、この主宰者は父なる神と矛盾するものではなく、前者は後者に含蓄されるようになる。

「上帝」という表現の後ろには、「忠」がある。「忠」は海老名のキリスト教の神理解にとって最も大事なものだと思われる。それは、海老名が神を理解するにあたって、「忠」という倫理関係から出発し、神と人間の人格的関係にもっぱら集中し、この関係から神を理解しようとしたからである。即ち、人間相互の倫理関係をモデルとして神と人間の人格的関係を通して神の理解へ到達しようとしたのである。

海老名は、この「忠」を媒介した第一回目の体験に関して次のように言っている。

「けれども我の復生は明治八年初春の一夕の變化であったと思ふ。この復生あつた為めに、三年有半の激烈なる戰闘は繼續せられ、最後の赤子の一呱によって決戰的勝利者たるを得たと信ずる」[84]。

海老名の場合、「上帝」は消えたのではなく、「神」の一つの側面として存在するようになる。「上帝」が消えてはないが、もはや「上帝」を持ってキリスト教の神を表現しきれなくなる。

この時に、総称的な用語「神」がその特徴を発揮する場を得るだろう。「最高者なる神」、「父なる神」、…キリスト教の神のあらゆる特徴を含蓄させる力を持っているのである。

しかし、ここで見逃してはならないのは、キリスト教の神の日本語訳語としての「神」が成立するのは、「神」が総称的な表現だからというだけではない。それを訳語として使用

した日本人キリスト者、すなわち受容者たちがキリスト教の神を正しく理解しようとした努力があったからである。

## 5、終わりに

日本語訳聖書の場合、最初からキリスト教の神の訳語として「神」が採用された。それに対して何の反論もなかったかのように見える。しかし、実際の日本人キリスト者たちが書いた文章の中には「神」以外の様々な表現がある。植村正久、内村鑑三と海老名弾正が使用した「上帝」を分析してみると、中国語の場合になされた訳語問題の中で現れた争点を確認することができた。しかし、このような葛藤の中でも、「神」という一つの表現に落ち着くプロセスが見られた。それは、日本初期のキリスト者たちがキリスト教の神を受け入れるプロセスを表していると思われる。

キリスト教の神の訳語を考察するとき、受容者を考慮に入れる必要が出てくる。最初に「神」が宣教師によって決められたとしても、「神」をキリスト教の神の訳語として成立させるのは受容者によるのである。

キリスト教の神の訳語である「神」を考察する時、受容者を考慮に入れることは重要であるように思われる。また日本語の「神」への考察は、「用語問題」を考えるに当たって、非常に重要な一面であるように思われる。

---

[1]鈴木範久「「カミ」の訳語考」(藤田富雄編『講座宗教学 4　秘められた意味』東京大学出版会、1977 年。)306 頁。
[2] 前掲書、304－307 頁。
[3]前掲書、310 頁。
[4]前掲書、314 頁。
[5]前掲書、314 頁。
[6]前掲書、315 頁。
[7] 漢字が日本語に入ってからの意味内容。
[8]鈴木範久「「カミ」の訳語考」(藤田富雄編『講座宗教学 4　秘められた意味』東京大学出版会、1977 年。)309 頁。
[9]『本居宣長全集』第九巻　筑摩書房、1968 年。125 頁。

[10]鈴木範久「「カミ」の訳語考」(藤田富雄編『講座宗教学 4　秘められた意味』東京大学出版会、1977 年。)300 頁。
[11]鈴木範久「「カミ」の訳語考」(藤田富雄編『講座宗教学 4　秘められた意味』東京大学出版会、1977 年。)297-298 頁。
[12]前掲書、324 頁。
[13]前掲書、326 頁。
[14]植村正久は、明治初期に聖書が日本語に翻訳される時期を生きた人物である。植村正久は明治から大正期にかけて日本のプロテスタント教会を指導した伝道者、思想家として著名な人物であり、その業績は高く評価されている。(『アジア・キリスト教・多元性　現代キリスト教思想研究会』「植村正久とキリスト教弁証論の課題」芦名定道、2007 年、1 頁。)また植村は明治元訳の旧約聖書（詩篇、イザヤ書、雅歌）の翻訳に直接参加したことがある。(『植村正久と其の時代』(４)、教文館、昭和 13 年、185 頁。)翻訳者として、また受容者としても、植村正久の聖書翻訳に関する考えを見ることは聖書翻訳を日本語で考えるにあたって、有意義であるように思われる。
[15] ここでは、『植村正久著作集』1～7、新教出版社、1967 年、に限って論じることにする。
[16] 「日本のキリスト教文学」(『植村正久著作集 3』新教出版社、1967 年)、114-117 頁、
[17] 『植村正久著作集４』新教出版社、1967 年、19 頁、ローマ書の引用は「神」版の漢文聖書である。29 頁、ヨブ記の引用は「上帝」版の漢文聖書である。
[18] 『植村正久著作集』(1) 新教出版社、1966 年、72 頁。
[19] 『植村正久著作集』(5) 新教出版社、1966 年、21 頁。
[20] 前掲書、119 頁。
[21] 前掲書、51 頁。
[22] 『植村正久著作集』(5) 新教出版社、1966 年、55 頁。
[23] 前掲書、135 頁。
[24] 『植村正久著作集』(7) 新教出版社、1967 年、60 頁。
[25]前掲書、42 頁。
[26]『植村正久著作集』(4) 新教出版社、1966 年、370 頁。
[27] 前掲書、371 頁。
[28] 日本の名著 38『内村鑑三』松沢弘陽責任編集　中央公論社　1971 年、120～121 頁には、内村鑑三はが、『馬可講義』(マルコ福音書の講義 1874)を買って、父親(内村宜之)に読ませた記録がある。『馬可講義』は、Ernst Faber(1839～1899、中国名:花之安。中国に伝道しに来たドイツ人宣教師。礼賢会所属。)が中国人向けに漢文で書いた著作である。Ernst Faber はその中では、キリスト教のカミを「上帝」にしている。そのため、書簡の中で内村鑑三が父親に合わせて敢えて「上帝」を使用した可能性はあるが、同時に「神」も使用しているため、断言はできない。
[29] 『内村鑑三全集』5 巻、335 頁。
[30] 『内村鑑三全集』7 巻、277 頁。
[31] 『内村鑑三全集』第 8 巻、220 頁。(明治 33 年)
[32] 『内村鑑三全集』第 10 巻、246 頁。(明治 35 年)
[33] 『内村鑑三全集』第 7 巻、277 頁。(明治 32 年)
[34] 『内村鑑三全集』第 7 巻、434 頁。(明治 32 年)
[35] 『内村鑑三全集』第 3 巻、243 頁。(明治 29 年)
[36] 『聖書のはなし』内村鑑三選集　第七巻、1990 年、岩波書店、59 頁。
[37] 前掲書、57 頁。
[38] この文章は、内村の演説を筆記で書いたものであるため、ここで使われている「上帝」を内村が使用したものにして妥当なのかが疑われるかもしれない。しかし、同文章には「神」も出てくることと「上帝」は「神」と発音上も似てないことを考えると、両者は何らかの

形で区別されていると考えられるのが妥当であろう。実際、内村によって「上帝」にルビがついている箇所が二か所あるが、それぞれ「じゃうてい」と「ぜうてい」であり、「かみ」とははっきりと区別されている。また、内村がチェックをしたと記されているため、たとえ筆記記者が勝手に書き換えたとしても、内村としては違和感がなかっただろう。ゆえに、内村が使用したものにしても良いかと思われる。

[39]海老名弾正「永生（かぎりなきいのち）」『新人』第二巻　第三号、15 頁。

[40]海老名弾正「イエス・キリストの神」『新人』第二十四巻　第七号、5 頁。

[41] 同上。

[42]海老名弾正「天国論」『七一雑報』八巻　第五号、34 頁。

[43]海老名弾正「天国論」『七一雑報』八巻　第五号、35 頁。

[44]海老名弾正『基督教概論未完稿　我が信教の由来と経過』日本図書センター、2005 年、57 頁。

[45]前掲書、57～58 頁。

[46]前掲書、58 頁。

[47]前掲書、60 頁。

[48]同上。

[49]「長い間養はれた為に、忠君の精神的要求がある。」(前掲書、53 頁。)

[50]海老名弾正「聖書講義　馬太傳第五章(承前)」『新人』第一巻　第十一号、16 頁。

[51]海老名弾正「第二十世紀の基督教」『新人』第一巻　第七号、3 頁。

[52]海老名弾正『基督教概論未完稿　我が信教の由来と経過』日本図書センター、2005 年、68 頁。

[53]森岡清美『明治キリスト教会形成の社会史』東京大学出版会、2005 年、4-72 頁。
『隅谷三喜男著作集第八巻』岩波書店、2003 年、12-13 頁。

海老名弾正に関しては、この特徴が植村正久と内村鑑三より著しいといえよう。

[54]当時の中国で使用されたと思われる康熙字典解釈における「帝」の項目には、次のような意味が列挙されている。

「【說文】諦也。王天下之號也。【爾雅·釋詁】君也。【白虎通】德合天者稱帝。【書·堯典序】昔在帝堯，聰明文思，光宅天下。【疏】帝者，天之一名，所以名帝。帝者，諦也。言天蕩然無心，忘于物我，公平通遠，舉事審諦，故謂之帝也。五帝道同于此，亦能審諦，故取其名。【呂氏春秋】帝者，天下之所適。王者，天下之所往。【管子·兵法篇】察道者帝，通德者王。【史記·高帝紀】乃卽皇帝位汜水之南。【註】蔡邕曰：上古天子稱皇，其次稱帝。　又謚法。【史記·正義】德象天地曰帝。　又上帝，天也。【易·鼎卦】聖人亨，以享上帝。【書·舜典】肆類于上帝。　又五帝，神名。【周禮·春官·小宗伯】兆五帝于四郊。【註】蒼帝曰靈威仰，赤帝曰赤熛怒，黃帝曰含樞紐，白帝曰白招拒，黑帝曰汁光紀。【家語】季康子問五帝之名。孔子曰：天有五行，金木水火土，分時化育以成萬物。其神謂之五帝。　又星名。【史記·天官書】中宮天極星，其一明者，太乙常居也。【註】文耀鉤云：中宮大帝，其精北極星。春秋合誠圖云：紫微大帝室，太乙之精也。正義曰：太乙，天帝之別名也。【又】大角者，天王帝廷。【註】索隱曰：援神契云：大角爲坐候。宋均云：坐，帝坐也。【又】太微三光之廷，其內五星，五帝座。　又地名。【左傳·僖三十一年】衞遷于帝丘。【註】帝丘，今東郡濮陽縣，故帝顓頊之墟，故曰帝丘。」

この解釈を整理してみると、「帝」には、以下の六つの意味があるのがわかる。①君主の称号、皇帝。②中国古代帝王、諸侯、卿大夫、大臣などが死んだあと、朝廷が、彼らの生前の行いと道徳性によって、表彰の意味で与える称号。“谥法”。③（天の神。古人或は宗教信徒の心の中での天地創造者と主宰者）上帝、天。⑤星の名前。⑥地名（帝丘）。

[55]『内村鑑三全集』第 11 巻、196 頁。(明治 36 年)

[56] 『内村鑑三全集』第 11 巻、196 頁。(明治 36 年)

[57]同上。
[58]前掲書、195 頁。
[59]同上。
[60] 幸徳秋水が書いた『帝国主義』の序を参照。
[61]『非戦論』内村鑑三選集　第二巻、岩波書店、1990 年、159 頁。
[62]『非戦論』内村鑑三選集　第二巻、岩波書店、1990 年、59 頁。
[63] 同上。
[64]『非戦論』内村鑑三選集　第二巻、岩波書店、1990 年、159 頁。
[65] Chinese Repository Vol.XVII.—March,1848.—No.3 p18 W.H.Medhurst.
[66] ibid. p18.
[67] Chinese Repository Vol.XVII.—February,1848.—No.2 p63 William J.Boone.
[68] ibid.p63.
[69] Chinese Repository Vol.XVII.—October,1848.—No.10 p494 W.H.Medhurst.
[70] ibid.p494.
[71]裨治文(E.C. Bridgman)、克陛存(Michael Simpson Culbertson)『舊約全書』江蘇滬邑美華書館 1863。
[72] Chinese Repository Vol.XVII.—October,1848.—No.10 p494 W.H.Medhurst.
[73]中国古代神話の中に出てくる五つの天帝。五帝に対する解釈は統一していないが、その中から二つを挙げてみる。1．唐贾公彦疏：“五帝者，东方青帝灵威仰，南方赤帝赤 票怒，中央黄帝含枢纽，西方白帝白招矩，北方黑帝叶光纪。” 2．《老子中经》，载，“东方苍帝，东海君也”，“南方赤帝，南海君也”，“西方白帝，西海君也”，“北方黑帝，北海君也”，“中央黄帝君也”，“与中太一并治度人命，爱养善人，成就人。”任继愈主编，宗教词典编辑委员会编《宗教词典》上海辞书出版社, 1981 年。
[74] もちろん、日本語の神と中国語の神の間には相違がある。ただここでは、同じく「礼拝対象全体を表現する包括的な単語」を表現することができるため、日本語と中国語を同時に論じても差し支えないだろう。日本語の神と中国語の神の間の相違に関しては??を参照せよ。
[75]海老名弾正「永生（かぎりなきいのち）」『新人』第二巻　第三号、15 頁。
[76]同上。
[77]海老名弾正「新有神論」『新人』第十八巻　第五号、122 頁。
[78]海老名弾正「君子国の意義」『新人』第四巻　第二号、21 頁。
[79]「教育勅語と基督教」『新人』第十二巻　第一号、３頁。
[80]「吾人が本領の勝利」（目次タイトルは「我が本領の勝利」）『新人』 第十四巻第十二号　18 頁。
[81]海老名弾正「信仰と忠君」『新人』第十二巻　第二号、8 頁。
[82]同上。
[83]海老名弾正「新有神論」『新人』第十八巻　第五号、124 頁。
[84]海老名弾正「新復生論」『新人』第十七巻　第 4 号、99 頁。